

ヨーロッパ班視察報告＜ 9 ＞

視 察 項 目	まちづくり施策について
視 察 日 時	2024年11月9日（土） 午前10時00分～12時30分
視 察 先 名	スピタルフィールズ、ブリックレーン、ショーディッチ
説 明 者	松谷朗氏（クレア）、Andrew Steavens、Ritsuko Hidaka
担 当	岩隈 千尋

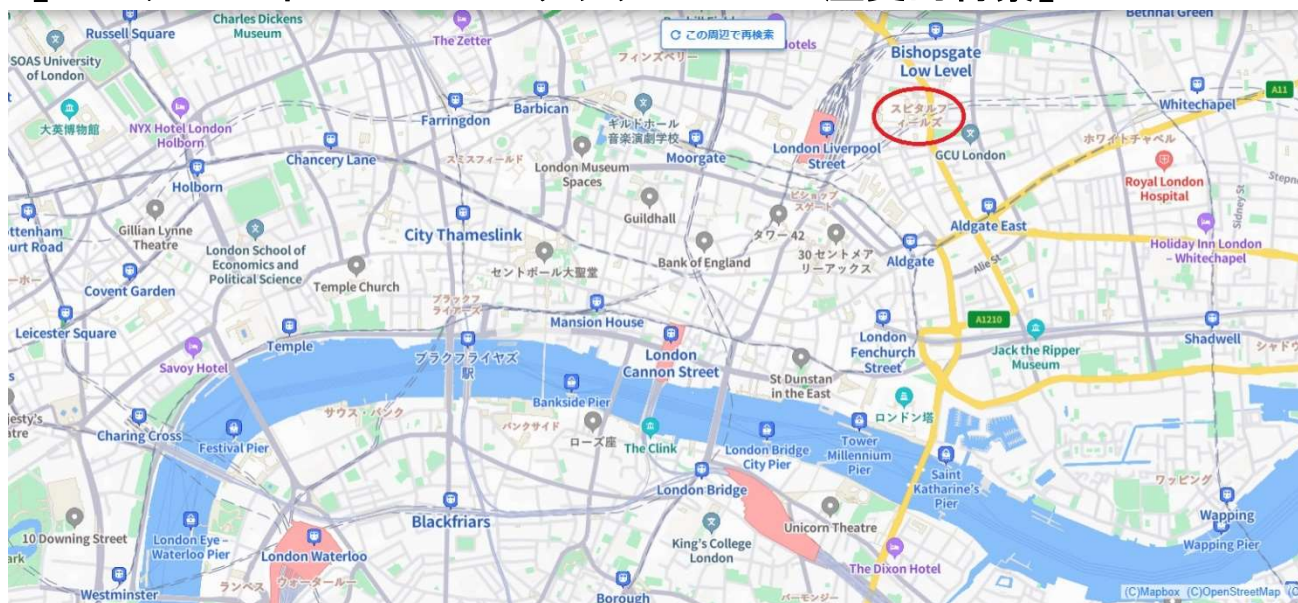
【視察目的】

現在、川崎市では、若者文化の発信により街の魅力を高めることで若い人々が集い、自らの可能性や挑戦できる環境づくりに向けた取組を進めている。平成30年（2018年）に「若者文化の発信によるまちづくりに向けた基本方針」を策定するとともに、今年（2024年）の、「川崎市市制100周年記念事業実施計画・Colors, Future! Actions プラン」改定版においても、若者文化は15のActionテーマの中にひとつに位置付けられ重要施策のひとつとなっている。

基本方針における若者文化の定義としては、「川崎市の特徴や地域資源を活かしたまちづくりを進めていく観点から、川崎市で盛んであるストリートカルチャーやエクストリームスポーツを基本方針における若者文化として定義する。」としている。ストリートカルチャーとは、1970年代のニューヨークのブロンクス地区におけるアフリカ系、カリブ系、ヒスパニック系の人々から生まれた文化。ブレイキン(ブレイクダンス)・MC(ラップ)・DJ・グラフィティの4要素から構成されている。また、エクストリームスポーツは、ストリート系のものとして、ストリートカルチャーでもあるスケートボード、ローラー/インラインスケート、BMXフリースタイルなど。自然相手のものとして、BMXレース、マウンテンバイク、サーフィン、フリースタイルスキー、クライミングなどが挙げられる。2024年に開催されたパリオリンピック2024でのブレイキン女子代表で金メダリストのAmiさん、男子代表のShigekixさんはブレイキンの聖地と呼ばれているJR武蔵溝ノ口駅で研鑽を積んで世界のトップクラスのダンサーに成長したことは記憶に新しい。

今回の視察では、川崎市が若者文化に基づいたまちづくりを行うためのコンセプト、アイデアの参考とした英国ロンドン市東部のタワーハムレッツ区のスピタルフィールズ、ブリックレーン、ショーディッチといったイーストエンド地区を実際に訪問し、同地区の歴史や文化、特にグラフィティやストリートアートをテーマにしたまちづくりの背景について学んできた。

【スピタルフィールズ ブリックレーンの歴史的背景】



視察団は、スピタルフィールズ、ブリックレーン、ショーディッチ（以下、同地区）の中心的な場所である「クライスト・チャーチ・スピタルフィールズ教会（イングランド国教会が18世紀初頭に建設）」及び「スピタルフィールズ・マーケット（17世紀ビクトリア時代からの市場）」に集合し同地区の現場視察を行った。



Christ Church Spitalfields



Spitalfields Market



現在は、歴史的建築物になっている

ブリックレーン（道の名前）の語源は、文字通りブロックやレンガに由来している。16世紀頃、ヨーロッパ大陸のフランドル地方（英語名：フランダース）から移民が流入し、スピタルフィールズ教会やマーケット、そしてブリックレーンの周辺に移住した。きっかけは、同地方での政治的内乱によるもので主に毛織物業者がイギリスへ流出した。移民の一部が建築に必要なブロックやレンガを作っていたためストリートの名前がブリックレーンと呼ばれるようになった。

17 世紀になると、宗教弾圧を受けたフランス・カルヴァン派の新教徒「ユグノー」たちが大量にフランスからイギリスに移住した。（特に、1685 年のルイ 14 世によるナントの王令廃止による影響が大きい。）同地区に住み着いたユグノーたちは、絹織物を作ることに長けておりヴィクトリア女王の衣装もこの地区で織られた。現地視察では、当時の職人らが自宅の最上階で天日を探りながら仕事をしている歴史的建築物も確認できた。



17 世紀後半には、現在同地区のシンボルの建築物である、レンガ造りのビール工場「ブラック・イーグル醸造所」がベンジャミン・トルーマンによって建設される。そして、19 世紀にはアイルランド移民やユダヤ移民、20 世紀にはバングラデシュ移民が同地区に流入する

に至っている。1997 年には、スピタルフィールズとブリックレーン地区は、「バングラタウン」としてブランド化され、今日、同地区はバングラデシュ移民を中心としたコミュニティー地区になっている。ご当地グルメとしても「カレー」が認知されている。

同地区の歴史的背景を学ぶと、数百年に渡り様々な民族や人種が入れ替わり移民として流入しており、川崎市の特徴である「多様性」、「多文化共生」と非常に親和性があることが理解できる。

【貧困の街からアートの街へ】

18 世紀中頃から 19 世紀初頭の産業革命は、すでに絹織物産業の街として認知されていたスピタルフィールズやブリックレーンに変化をもたらした。当時、スピタルフィールズ法（1773 年に成立）という絹織物産業に雇われている織布工の賃金を、法律によって規定するほど労働者保護的内容をもった賃金規制の法律が存在していたが、機械化や時代の流れにより同地区の小資本経営・家内工業は影響を受け、移民と労働者からなるこの街はロンドンの中でも最貧困街、スラム街へと転落していった。切り裂きジャック連続殺人事件が発生したのも同地区である。

1884 年、近接地区であるホワイトチャペルに世界初のセツルメント（宗教家や学生、知識人がスラム街に定住して、医療・教育・福祉活動などの社会事業を行う団体・施設のこと。）として、「トインビー・ホール」が設立され、スラム街の一掃が行政から計画された。そこから、公営住宅や公営美術館の建設が始まり、英国全体のモダンアートを牽引する地区となっていく。しかしながら、治安等については変わらず不安定な地区であり、1990 年代に入ると壁の落書きが増加していった。タワーハムレッツ区の行政は、同地区の治安を含むイメージ向上のために壁の落書きをストリートアートに変える取組を行っていく。許可された地域での公序良俗に反しない内容であればストリートアートとして認める方針が決定され、現在では社会的なメッセージを伝えるストリートアートだけでなく彫像やマンホール、道路標識も現れ、ストリートアート、グラフィティが同地区の街全体を活性化することに繋がっていった。いわゆる「ジェントリフィケーション（比較的低所得者層の居住地域が再開発や文化的活動などによって活性化し、その結果、地価が高騰すること）」を具現化した街へと変貌していった。一方で、タワーハムレッツ区としては、同地区の観光名所化についてはオーバーツーリズムの観点からも積極的に行ってはいないが、ロコミやインターネット等を通じてすでにロンドンの中でも有数な若者文化発祥の地へと変化を遂げている。

【グラフィティやストリートアートは適法？違法？】

視察団は、ショーディッチ、スピタルフィールズ、ブリックレーン地区を巡り関係者から説明を受けながら現場視察を行っていたが、そこで議論となったのは「そもそも街角の壁にペイントすることは、どこまで許されるのか？」という疑問だった。結論から言えば、関係者からも明確な回答を得ることはできなかった。

グラフィティに関する様々な文献を調査したところ、アーティストの間でも「ストリートアーティストが公共物に絵を描いたらヴァンダリズム（破壊行為主義）。しかし、バンクシーが描いたらアート活動になる」と皮肉を込めて言う人もいた。

英国においても、バンクシーのような、作品が観光資源になるような著名なアーティストの作品と一般のストリートアーティストが描いた作品を適法、違法で判断することは困難であることが分かった。しかし、事実として同地区が有名、無名を問わずグラフィティ、ストリートアーティストが描いた作品の聖地となりロンドン屈指の観光地及び人気地区となったことは、作品が街の付加価値を高めることに大きな貢献となった証左である。

【ブリックレーン周辺のストリートアート】



著名なストリートアーティスト、スティック氏の作品。「ストリートで手を繋ぐカップル」
政治的メッセージが込められており、ブルカを着用している女性が白人と手を繋いでいる。
人種差別や女性蔑視に対するアンチテーゼ。



ベルギー出身ロアによる 2010 年の作品
4メートル弱の巨大な壁画で、
通称「ビッグバード」と呼ばれている。
ロアの作品の特徴は、大型動物や
絶滅危惧種を描く作風。



公的な道路への描写や
道路標識への作画も黙
認されている。

商店街の店舗やストリ
ートも壁画で埋め尽く
されていた。



【川崎市におけるストリートアート】

川崎市においても、新本庁舎の建設時において工事現場の壁面に長さ 16 メートルに及ぶミューラル(壁面)アートを制作している。(制作者:DRAGON76 氏) テーマとしては、川崎らしい地域資源である若者文化とし、スケートボードや BMX、ブレイキン、ダブルダッチを取り入れている。



2024 年 11 月には、市制 100 周年記念事業、全国都市緑化かわさきフェアが開催されることから、川崎駅から会場である富士見公園への道中に位置する「ハローブリッジ(歩道橋)」においてミューラルアートを作成している。(制作者: YUSEI unomori 2 名による合作) テーマは、緑化に不可欠な太陽のもと、川崎区の花「ひまわり」や、県立川崎高校で行っている養蜂のみつばちなど、「いのち」が共存する街をテーマに描画している。



【総括】



英語表記の道路名とバングラデシュの公用語であるベンガル語の表記が並んでいる。日本では、見られない光景だ。

今回、スピタルフィールズ、ブリックレーン、ショーディッチといったイーストエンド（ロンドン東部の通称）地区を現地視察し、川崎市との親和性をいくつかの点において確認することができた。

まず、「多様性」と「多文化共生」である。

川崎市は、2024年に市制100周年を迎えたが、記念映像ではその冒頭に「川崎市は、昔から複数の街道が存在し、多くの人が行き交うことで多様な文化が根付き、現在にも繋がる多様なものを受け入れ、新しいものに寛容な風土が育まれてきました。」と発信している。一方、今回視察団が訪れた同地区においても、ヨーロッパ大陸からの移民やアラブ移民、現在にも続くバングラデシュ移民など、同地区が多様性にあふれ移民に寛容な風土が醸成されてきたことは、川崎市と類似した歴史的背景があることが理解できた。また同地区が、長年に渡り移民問題や産業革命等といった工業化の中で、差別と貧困に苦しんできた歴史的経過は、体制・権力といった既成概念への反発に繋がりストリートカルチャーを生み出す土壌となっている。そのことは、川崎市臨海部の歴史とも類似するところがあるのではないだろうか。

冒頭の「視察目的」で述べたように、ストリートカルチャーは、ブレイキン

(ブレイクダンス)・MC (ラップ)・DJ・グラフィティの4要素から構成されている。ブレイキンについては、川崎市を拠点として活躍しているオリンピック代表選手や JR 武蔵溝ノ口駅がブレイキンの聖地と呼ばれるようになり、彼らのたゆまぬ努力と活動は市民権を経て文化へと昇華している。一方、グラフィティ、ストリートアートにおいては、川崎市では南部に作品が集中するなどいまだ発展途上段階であり一層の理解促進が求められる。今後は、多くの市民に認知されるとともに、多様な若者文化を発信する「まち」、若者が活躍する「まち」の牽引役としてグラフィティを含むストリートカルチャー全体の盛り上がり期待したい。議会としても多様な文化が息吹く街として一層の取組を支援していきたい。